

熊本の華人展 vol.2

熊本市現代美術館発行

AKL

ART KISS LETTER
FOR KUMAMOTO ART PEOPLE
Contemporary Art Museum,
Kumamoto

vol.24



熊本の華人展 vol.2

前期:平成17年11月4日(金) - 11月6日(日)

後期:平成17年11月11日(金) - 11月13日(日)

熊本市現代美術館では平成14年10月の開館から現在まで、市内21流派の先生方のご協力を得て、館内に設けた2つのいけばなコーナーに一日も欠かす事なく、素晴らしいいけばな作品を展示していただいております。それは静謐にして、不断の精神的闘争の上に、数百年の歴史を築いてきた、伝統としての「いけばな」に内在する革命性を、美術館の日常の活動の中で問い直したいという思いから生まれた活動でもありました。

この度、昨年(平成16年)の第1回展に引き続き、第2回の「熊本の華人展」が開催されました。伝統に根ざした現代美術としての「いけばな」の醍醐味を、心ゆくまで堪能できる展覧会となりました。(E.Z)

m u s e u m i n f o r m a t i o n

モクモク工房 第20回「時計」

2005.9.8/9.22/10.6

木曜日の午後2時から5時まで、館内5階のキッズファクトリーで、大人のためのおもしろ陶芸教室を開催しています。第21回は宮島製にちなみ「時計」を作りました。いろんな形の個性溢れるおもしろ時計。その時計たちはこれからどんな“時”を刻むのでしょうか。(R.Y)



蝶の忌記念・海老原喜之助 モザイク壁画「蝶」を見に行こう

2005.9.18

昭和45(1970)年9月19日海老原喜之助はフランスにて生涯を終えました。昨年開催の「画家再生-海老原喜之助生涯100周年祭」開催以来当館では、海老原喜之助を偲び、新市街に今も残るモザイク壁画「蝶」の見学会を行っております。命日前日の18日の午後、アーケードの上に真っ青な空を背景にひっそりとたたずむ壁画の前で、25名の参加者とともにも黙とうを捧げました。(N.I)



開館3周年記念キッズファクトリー壁画プロジェクト

開館3周年記念キッズファクトリー壁画プロジェクトを10月10日(祝日)に開催しました。このプロジェクトは、朝11時から夜の7時まで、館内5階のキッズファクトリーの壁に「愛」をテーマに自由にかくがきをしてもらうというイベント。2002年開館記念に続き2回目で、普段「らくがきはダメ!」と叱られている?子どもたちや、そして子どもに買って楽しむ大人たちの「愛」が形となって表現されました。壁一面に輝いているそれぞれの「愛」のらくがき。これからこの場所を訪れる人たちをやさしく包みこんでくれる壁画となるでしょう。(R.Y)



熊本市現代美術館開館記念日スペシャルトーク 「美の真実に触れるとき」

10月12日、開館3周年を記念して、安永路子先生のスペシャルトークを開催いたしました。安永先生のとても美しく、心地よい言葉がホームギャラリーを包み込みました。「言葉が天からおりてくる。おりてくる言葉はすべてまらぬ。なぜまらぬかという太陽がまらぬから。だから、世の中はすごく円満になるのですよ。」というお話がとても印象的でした。(N.I)



古今東西お菓子対決一秋の陣

10月12日、熊本市現代美術館の開館3周年を記念し、「誕生日」をテーマにしたお菓子のコンテストを開催しました。6名の方々が力作を発表、審査委員長の磯崎裕介さんをはじめ、審査員の甘いもの好きスタッフは、じっくり試食審査。いろんな思いが詰まったおいしいお菓子ぞろい、誕生日を華やかに彩りました。(Y.H)
入賞者は以下のとおりです。最優秀賞「誕生日がX'mas」大城戸恵子さん、健兵賞「CAMK3とハッピーバースデー」池田あ梨さん、優秀賞「秋の収穫祭」村上恵子さん、優秀賞「小さい秋 月つけた」岡本敦子さん、アイデア賞「あったか記念日」松原梨沙さん、アイデア賞「ハッピーバースデー」山口久美子さん。



東部児童館・熊本市現代美術館共催ワークショップ

第3回 守山栄賢さん(木工芸家)による「小枝を使った木工工作」 2005.9.3

小枝を使って、ミニカー、椅子・ベンチ、笛を作りました。「自分の手でつくった木のおもちゃは、味があって、愛着がわくものです」と守山さん。参加者は、一生懸命小刀と鉋盤しながら、自分だけのおもちゃを完成させました。



第3回「小枝を使った木工工作」

第4回 井形理恵さん(照明プロデューサー)による「光であそぼう」 2005.9.17

当館アートロフトの照明設備を使って、光のしくみや効果について遊びながら勉強しました。「影は何色?黒?そうかな、色がついた影もあるよ!」。楽しい井形さんのお話を聞きながら、光の不思議に興味津々のワークショップでした。



第4回「光であそぼう」

第5回 宮井政次さん・宮井正樹さん(カメラマン)による 「おもしろ写真をとろう」 2005.10.1

テーマは「かお」。館内や美術館周辺に出かけて、人の顔に見えるものを、次々とデジタルカメラで撮影しました。発表会では、それぞれの自信作に、宮井さんがすてきなコメントをつけてくれました。写真のおもしろさに触れることができ、参加者一同大満足のワークショップでした。



第5回「おもしろ写真をとろう」

第6回 岡山瑞穂さん(樹木医)による 「ネイチャーゲームで街の緑を探そう」 2005.10.15

みだんは見通して、街の中の緑に気づいてもらおうという今回のワークショップ。自然のものから洞窟模様や三角、四角などの形を探すゲームや、目隠しをして木を触るゲームを通して、自然に触れます。街で暮らしていても、自然に囲まれていること、みんなで改めて実感しました。



第6回「ネイチャーゲームで街の緑を探そう」

SUITT KUMAMOTO

【スイット・クマモト】

今年度のスイット・クマモトは、当館の展示室GIII(ジースリー)での展覧会をご紹介します。

GIII.vol.31 (2005.9.7-10.2)

光の絵画vol.2 菊池恵楓園絵画クラブ展



vol.31 展示風景

一昨年に引き続き、光の絵画vol.2(菊池恵楓園絵画クラブ展)が開催されました。

今年7月に惜しまれつつも逝去された森繁美さんの〈九十九島〉をはじめ、絵画クラブの8名による力作29点が並びました。丹精込めた花々や、帰ることを許されなかった故郷の風景を、独特の色使いで力強くまた時にはやさしく描かれた作品の数々からは、作者の思いと願いが伝わってきました。(E.Z)

GIII.vol.32 (2005.10.5-10.30)

熊本日日新聞社報道写真展—眼の証言—終戦から今日まで



vol.32 展示風景

熊本日日新聞社との共催で、「熊本日日新聞社報道写真展—眼の証言—終戦から今日まで」を開催致しました。熊本大空襲で焼け野原となった市中心部の風景からはじまり、150点の報道写真とともに熊本の戦後60年を振り返りました。訪れた方々の中には懐かしさだけでなく、様々な思い出とともに熊本の歴史をどのように若い世代に伝えていったらよいのかなど、複雑なおもいもあるようでした。熊本の歴史を知るだけでなく、とても感慨深い展覧会となりました。(N.I)

WORLD NEWS

●第8回リヨン・ビエンナーレ 2005.9.14-12.31

キュレーターにNicolas BourriaudとJérôme Sansを招いて行われた第8回リヨン・ビエンナーレは、Ann Veronica Janssensの人口スモッグを突き抜けて蛍光グリーンの色を当てた、体全体が光に包まれる作品や、Martin Creedのゴム風船を充満させた部屋など、遊び心のある作品が多数出品され、観客を惹きつけるものだった。なかでも注目はKader Attiaのインスタレーション。会場で作った帳の中、子供の人数は20体ほど、いろんな嗜好をして置かれ、そしてそこに何十個もの生きたハトが一緒に入れられている。ハトたちはえさをついばんだり、人形にとまったり、ふんをしたり、したい放題の様態一まきに「終末的光景」を見た思いだ。(K.K)



横浜トリエンナーレ

●第9回イスタンブール・ビエンナーレ 2005.9.16-10.30

世界各国から53作家が集い、新市街の7会場で開催されました。今回の展覧会タイトルは「イスタンブール」。街を歩き、古い建物に足を踏み入れ、歴史を紐解きながら、都市との対話を重ねた作品が中心となりました。中でも、古いアパートの部屋の壁に貼られた生活の痕跡に「この穴にはかつて絵を掛けるためのフックがあったと思われる」等をマジックで書き留めたネドゥコ・ソラクコフの作品は、現在と過去を結ぶ歴史と想像力のバランスを考える機会を与えていました。(Y.H)

●横浜トリエンナーレ2005 アートサーカス 2005.9.28-12.18

第2回目の横浜トリエンナーレは、会場を横浜市山下町3号、4号上層(いわゆる食庫)ほかでの開催となりました。逃に面した山下公園から会場エントランスまで続く長い道のりは、ダニエル・ビュランの作品(On the Waterfront)が展示され、赤日の旗模様の旗のアーケードが美しくなびいていて、距離を感じさせませんでした。オープニング当日には、ビュラン・サーカス・エトカンによるサーカスのパフォーマンスも開催、観客の売上、旗の作品を崩壊する様子、スリリングなものでした。

今回のトリエンナーレは、全体的に、マイナス要素をプラス思考によって打開、という印象を受けました。港のふ頭、食庫という風情豊かな会場では、観客に強い素材の作品(例えば写真など)は展示に耐えられませんが、大食庫の天井の高さを利用し、会場内に全く独立した家屋型のインスタレーション作品を制作したアーティスト達が多く目立ちました。(H.T)

AKL

ART KISS LETTER
FOR ECANADIC ART PEOPLE
Contemporary Art Museum,
Kumamoto
vol.24

●お知らせ

肩たたき券ワークショップを行いました
9月19日(祝)敬老の日を記念して、「肩たたき券をくばる」コーナーを設置しました。コーナー周辺にペンなどを置き、みなさんにご自由に作って持って帰っていただきました。

執筆各一覽

*キャラクター取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

英城日山 Syozan Kaneshiro (書道家)

暮山夜草 Tanso Moriyama (書道家)

本田代志子 Yoshiko Honda (熊本市現代美術館学芸員)

宮座江美 Emi Zoza (熊本市現代美術館学芸員)

金海誠 Kodama Kanazawa (熊本市現代美術館学芸員)

宮澤治子 Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)

坂本鏡子 Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館学芸員)

山室りさ Risa Yamamuro (熊本市現代美術館学芸員アシスタント)

竹田英 Akane Takeda (熊本市現代美術館学芸員アシスタント)

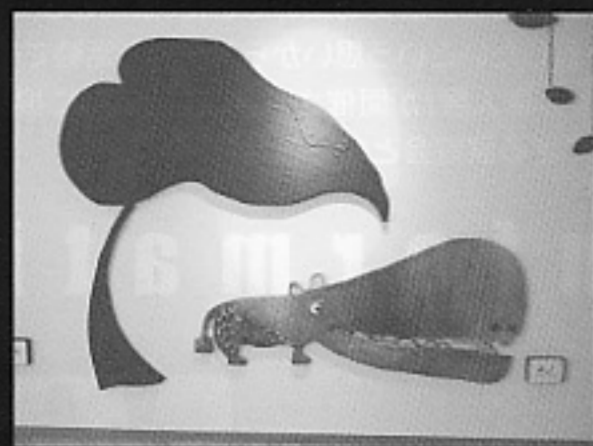
伊豆菜々 Nana Izu (熊本市現代美術館学芸員アシスタント)

眞田聡美 Satomi Sonoda (熊本市現代美術館学芸員アシスタント)

編集後記

展覧3年目のパステル。特別展も含め、全館すべてを無料開放した10月12日は、平日にも関わらず、朝から多くの皆さんにご来館いただき、開館から67万人のそれぞれの記憶に、改めて思いを馳せる一日となりました。AKLもますます充実して、頑張ってます。どうもこれからもよろしくお願いたします。

編集長 南島宏



「色彩カーニバル」

2005.8.2-8.28 阿蘇白水郷美術館
阿蘇郡白水村一画1247 TEL0967-62-8200

池田美樹さん、masahiroさん(イラストレーター)、gajuさん、杉原由希子(イラスト・デザイン)さんによるグループ展。
池田美樹さんは劇団から代表であり、舞台衣装をデザイン・制作してきたが、今回の展示では舞台の写真とともに衣装の展示を行っていた。デザインとしては素材の挑戦的な組み合わせなどさまざまな工夫がなされており、なによりも色彩豊かで美しい仕上がりで、役者の動きやキャラクターを強調するように考えられている。非常に魅力的な作品群であった。

造形作家gajuさんは、これまで発表してきた抽象的表現の作品とは違って、こども心を惹くような楽しい作品を大作のシリーズを発表。表情豊かなうさぎやカバなど、チャーミングな動物達が楽しく生活している様子が、gajuさん独特のシックな色彩でいざとられ、巨大な壁面レリーフとして制作されていた。あわせて、公開制作として、カオマンガイさんとgajuさんのユニットkg(キログラム)による、ライオンの腹を持つツボの作品が発表された。今後、絵本作製も予定されているそうである。

「色彩カーニバル」展は、おもちゃ箱のような楽しさを目指したものだとなったが、まさにそのとおり、明るく楽しいムードに溢れていた。(H.T)



「第23回花の四季原色押し花熊本展」

2005.8.30-9.4 熊本県立美術館分館
熊本市千歳町2-18 TEL351-8411

急速脱水することで、自然そのままの色を生かす新しい押し花。熊本県内の8つの教室の方々の作品展。皆さんの合作の(花)は、アジサイ、朝顔、ブドウが、それぞれの特徴をふまえて丁寧に構成され、全屏目の光をうけ、華やかに情緒豊かな空間が広がっていた。(Y.H)



「PASSAGES TO OLYMP」

2005.9.9-9.28 茨城大学ギャラリー
熊本市花畑町10-25 TEL323-1122

Tomasz Wendlandのキュレーションで行なわれたこのメディアアートの展覧会は、芸術を志す学生を擁する茨城大学の取り組みとして、非常に意図的で興味を惹いたものであった。とりあげられた7人のヨーロッパの作家たちは、誰もがメディアアートのよそいきなイメージに反して、それぞれの独特な世界の中に鑑賞者にも共有される観念を感じさせた。アイスランドの作家、フリヌール・ハルソンは、風景を大きく入れた人物の写真に、文字で個人的なエピソードを重ねる。それは遠く離れた地の文化も違う人々への人間的な共感を寓えさせる。またヤスユキ・サエグサの、流れる海が写真に投影された作品には、写真の中で持たれたであろう家族の時間が想起させられた。ここでも自分とはつながりのない人々との、気配の交感とも見える体験が用意されていた。(K.K)



「アドリブ 渡邊忍展」

2005.10.1-10.14 ギャラリーキムラ
熊本市水道町3-5(上通KビルB F) TEL327-0166

3年前に再び絵筆を取り出して描き始めたという、渡邊忍さんの初個展。水溜りや切り株などを写真に照り、そのシルエットを生かしながら果物や爬虫類を描きこんだというユニークな「Ad Rip」シリーズはブルーがとて印象的な作品だった。また、きれいなものをありのまま描くのでなく、一般的には気持ち悪いと思われるモチーフ(壁の死骸の写真等！)でも作品として描き出すことで浄化し、美しいものに変化させたいという思いが込められた作品では、無常の想像力をかきたてる不思議な力強さがあった。「break」シリーズは、コーヒーなどで染めあげた何枚もの紙を使ってコラージュしてみたり、一切筆を使わずに彩色してみたり、渡邊さんが自分のスタイルを模索する過程がうまれている作品で、まさに展覧会名のとおりアドリブが見て取れた。これからは立体や大きな作品にも挑戦したいという渡邊さんの創作が楽しみである。(E.Z)



「秋のコラボBaq展」

2005.9.6-9.11 熊本県伝統工芸館
熊本市千歳町3-35 TEL324-4930

「今回、伝統工芸館が展示会場なので、それに合わせて、着物や帯の生地を現代の生地と合わせた「コラボ」のバッグを作ってみました。」と、作品を紹介してくれたのは作家の福村智美さん。初日には100点近くあったというバッグたちも終盤にはわずかに減っていき、初めの伝統工芸館での展示だったが、以前からフリーマーケットなどで発表を続けているので、ファンも多く、そのバラエティ豊かなデザインや色使い、使い心地の良さから人気の高さが伺える。短い頃から、母が作ってくれためもりもある洋服を着ながら、いつしか自分も洋服をはじめるようになった福村さん。本格的に制作活動を始めたら5年になるが、春から受けたインスピレーションから形を生み出す福村さん流のやり方は今でも変わらないスタイル。「将来は工房をもって作品を作り出したい」とキラキラとした表情で夢を語ってくれた印象が今でも忘れられない。(R.V)

ART de Gyan!

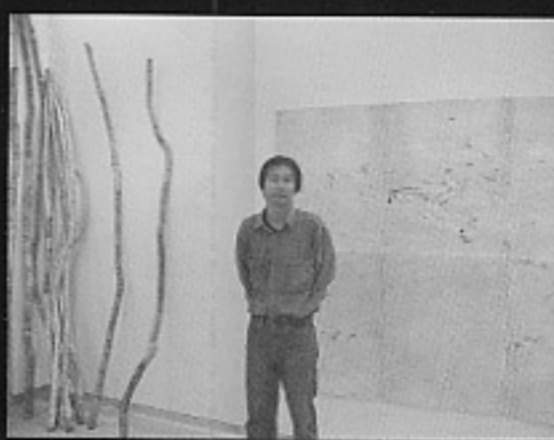
【アート・ド・ギャン】
熊本県(アート・ド・ギャン)の会です。



「西坂研一布にペインティング展」

2005.10.8-10.17 ギャラリーADO
熊本市河原町2 TEL352-1930

自作の織布にペインティングを施した西坂研一さん(熊本市)の熊本初個展。沖縄の仕事を離されたのをきっかけに、現在でも男性ばかり珍しいという、織物教室に通いはじめた。以後、各地で修行を重ねながら、最終・織物染織工房に10年在籍し、2001年より個人として活動する。意外にも、布にペインティングをはじめたのは今年の5月から。展覧会開始ギリギリまで粘り、30点を完成させた。心の赴くままに筆を走らせたというペインティングは、表現主義風の意味合い、素材には天然の安全な家庭用塗料を用い、文字通り、「描きながら考える」日々だという。ペインティングで身を立っていく上で「面白い批評も喜んで受けたい」と語る慎顔に、織物の採への自信と、新しいジャンルへ飛び込む意気を感じられた。(A.S)



「木寺正善展 CONTEMPORARY ART 2005 -紙の記憶-」

2005.10.12-10.17 ギャラリーカフェ ト
熊本市上通町5-46上通イーストンビル3F TEL326-3040

表現の手法として「版画」を用いた作品。木寺さんは「紙よりもプレスを通すことで感じるキレイさ(紙の質感)と通った。版の上のインクを刷り着るによって描き分けて「白い線」を描き、版も交わり合った線が白の濃淡を生み出していく。

制作を始めた頃は紙とインクのみで表現していたが、鮮やかさを感じるようになり、紙の周囲に糊をかけた。紙を切った紙を糊に貼るなど、「紙とインクの関係が変容していく」スタイルに変えていったという。「紙(版画)＝平面」という概念を取り払った、物体としての紙がそこに存在していた。

福岡を中心に活動、熊本での展示は久しぶりのこと。紙とインク、次はどんな変容を見せてくれるのだろうか。(A.T)



RKK学苑火曜水彩「みずゑの会作品展」

2005.10.11-10.20 画廊楽楽南風堂
熊本市北千歳町5-13宅建ビル1F TEL343-9664

RKK学苑主宰の火曜水彩講座「みずゑの会作品展」の出品者は、講師である前森三郎先生に師事している12名である。既に13年という歴史がある「みずゑの会」であるが、水彩を主体とした活動にちなんで「みず(水)」という名前をつけたという由来からも伺えるように、どの方の絵も非常に生き生きと活き活きとしている。モチーフは花や植物、果物、ピン、陶器といった静物画や、他には写実で生きた出かけたという阿蘇の柚子畑の風景画などもある。どの絵もとても色鮮やかでかつ繊細なタッチで描かれていて、見ていて楽しく、「みずゑの会」の方たちが本当に楽しんで描かれている様子が思い浮かぶにはいられなかった。たった今からでも、自ら筆を持ちたくなるような気になる素敵な展覧会であった。(S.S)

「独立書人団熊本支部書展」

2005.10.12-10.16 熊本県立美術館分館
熊本市千歳町2-18 TEL351-8411

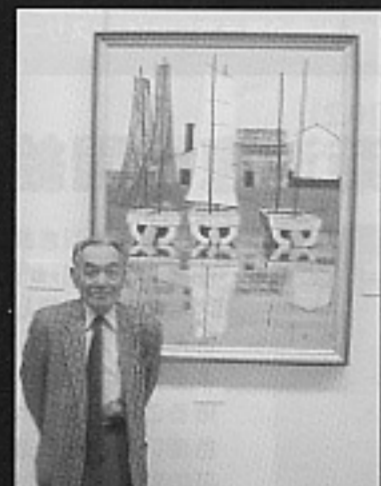
古典の踏襲を基にして、現代書を求める独立書人団熊本支部(徳永崇徳支部長)の10回展で、会員40人が1~2点ずつ出品している。総書量や装幀による一字書や多字数書は、変化に富んだ力強い作品群である。徳永支部長は「知新」を装幀でしかも長巻での運筆のうまさを見せている。さすがである。前川祐子さんは装幀の一部を組長徳永の筆で描いた装幀でまとめた。田代好美さんは社用紙の5行に首尾一貫してうまく書いていた。安藤啓吾さんは「知新」を文の濃淡で力強く見せていた。右山俊子さんの賞名装幀の「易元巻巻」は長巻装幀で装幀のある用筆が目についた。山本由美さんと小林昭子さんも賞名装幀の装幀であるが、よく練られた装幀に見えた。河内東葉さんの「訓」の大字書は、ダイナミックで動きが大きい作である。(S.K)

「第23回漢風会選抜展<書>」

2005.9.27-10.2 熊本県立美術館分館
熊本市千歳町2-18 TEL351-8411

書家川俣深石さんが主宰する書道会の選抜された会員58人が1人1点の新作品である。

今回は各自が好きな詩歌を選び創作したり、わかり易い興和体詩を、パネル、屏風等で展示していた。かなが中心であるが、作品はよく練られた装幀装幀の大作が多く、装幀もカラフルで、作品にあわせた工夫が感じられた。川俣会長は賞状装幀の装幀を賞状装幀の加工紙に装幀もあわせて大々的な装幀に見せた。河田三和子さんは、型押しした装幀に装幀3首をダイナミックな装幀でうまくまとめた。山下静香さんは装幀の加工紙に装幀で装幀の変化を見せ、マツトによくマッチしていた。木村愛さんは装幀装幀の装幀2首を対称に装幀で装幀2首を2首装幀に装幀しうまくまとめた。奥野子さんはJRのポスターのことは装幀装幀で装幀の装幀に装幀していた。(S.K)



「神宮司正 日本画展 -風景との出会いを求めて-」

2005.10.25-10.30 熊本県立美術館分館・分館2階第2展示室
熊本市千歳町2-18 TEL351-8411

1950年から2005年までの作品38点の展示。そのほとんどが50号を超える大作ばかりだ。西画は、日本の風景をはじめ京都、東南アジア、中国、ヨーロッパと幅広い。海外の風景シリーズは、装幀を装幀されてから始められた無名のスケッチがもとになっている。長年、装幀を装幀されてきた先生らしいユニークなキャプションで、描かれた風景や建物、その土地などにまつわるエピソードや当時の様子など、とても分かりやすく丁寧な装幀がなされている。

空の色、木々の色、土、石すべて異なる色で描かれた風景。ひとつひとつの作品から、描かれている対象、また描かれている後の装幀がとも感じられた。先生の優しく朗らかな雰囲気会場内に広がっているようでした。(N.I)